

社会福祉賞 「献血活動事業」

函館方面遊技業協同組合

北海道遊技事業協同組合連合会が毎年行っている『献血1000人キャンペーン』は8年目を迎えた。中でも突出した実績を残し、日赤血液センター長からも「すごいですね」と大きな評価を受けている、函館方面の活動を支えているのは、社会貢献への意識とアイデア、そして先頭に立つリーダーの高い意識である。

始めるといっても、目標の1,000人を達成するにはどうするのか。基本的な方策は北遊連傘下の5方面組合それぞれに委ねられた。

函館方面遊技業協同組合はまず、献血の専門家日本赤十字社函館血液センターに協力を仰いだ。いうまでもなく、血液センターは、移動献血車を計画的に巡回派遣している。巡回場所のひとつにホールも入れてもらおうと決めるのに日にかからなかった。幸いホールには大きな駐車場があり、移動献血車を長時間止めても問題ない。結果1〜2ヵ月間のキャンペーン期間中に、移動献血車を6〜7ヵ所のホール駐車場に巡回してもらおうという協力が得られた。

「行動して社会貢献できることをしよう」という発想がきっかけ

『献血1000人キャンペーン』が始まったのは平成10年(1998年)。北海道遊技事業協同組合連合会の事業委員会で出されたアイデアだった。「お金や物を寄付することも素晴らしいが、みんなが行動して貢献できることはないか」という一人の理事の発想がきっかけだった。

献血は誰でもできる社会貢献である。しかしいざキャンペーンを

協力の輪がしだいに広がる

とはいえ、短いキャンペーン期間中に目標とする人数分協力してもらうことは、そう容易ではない。献血車が近くにきているというだけで、誰もが献血に協力するわけでもない。

そこでまず、ホール従業員や管理者はもちろん、ホールに出入り

「献血キャンペーンが終わっても個人で献血は続けていくつもりです」

している業者の人たちに「献血キャンペーンにご協力ください」と呼びかけた。もちろん、ホールに来たお客様にも放送で協力を願ったが、ゲームに夢中なお客様の何人が訴えに応じてくれるか見当もつかない。100人に1人でも協力してくれればという気持ちだったという。

平成12年(2000年)からは、この活動と並行して地域内にある湯の川温泉の旅館協同組合にも協力を求めた。温泉地区の近くに移動献血車が立ち寄るホールがあることから、協力を要請したのである。旅館協同組合側は理事会に諮り協力を快諾してくれた。その結果、さらに多くの人に呼びかけることが可能になる。

リーダーの率先活動が社会貢献への意識を高めた

協力を呼びかけるアイデアは、飲料メーカーの協力を得て、献血した人に組合がジュースを謝礼することもあった。また社会福

祉施設が作る手製クッキーを差し上げた時期もある。福祉施設と献血の両方面で社会貢献になる、という発想だ。クッキーは評判が良く、結果として献血者数は増えることとなった。

しかし、「物をあげる」という方法には限度がある。活動のスタートが一人が最大限にできる社会貢献は献血であるなら、原点に立ち返ろうと、今はこの活動は行っていない。それでも献血者数が減ったわけではない。献血に協力した人たちの中に、自分でできる社会貢献の意識が芽吹いた証拠だろう。

「社会貢献に関心のある人が先頭に立って積極的に活動したことが最大の強みかもしれませんね」と振り返る、同組合の事務局長大倉宏一氏。様々ないいアイデアを出し実行したとしても、人を動かすためにはリーダーとなる人が、高い意識を持ち行動することが成功に導く一番の要因とも付け加える。例えば理事長の光金守弘氏は自らのホールで、従業員や業者を集めて積極的に献血を奨励したという。理事長がリーダーとして真っ先に活動することで周囲の人たちの意識も高まっていったのである。



お話を
伺った方

事務局長 大倉 宏一氏

「献血は一人でする最大の社会貢献。広報活動より個人に意識付けすることが大事」



献血は所要時間約10分、看護師がきびきびと対応



ホール従業員が積極的に献血に参加

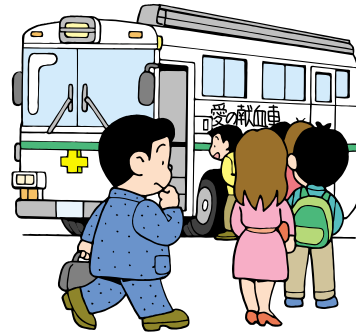


献血前には問診票に記入

一度協力してくれた人は2回、3回と協力してくれるそう。



写真提供/函館新聞



献血で変わった 若手従業員の貢献意識

大倉氏は、これまでの経験から「広報活動は意外と効果がない」と感じている。「ポスターをホールに貼り、チラシを配ったとしても、関心のない人は目にもとめてくれない」というのだ。が一度献血を経験してくれば、2回目、3回目としてくれる。だからこそ献血をしてもらうことが重要だ。逆にそれが一番難しい。

「献血は一人でもできる最大の社会貢献、ということ、まず意識付けていかないと効果は見えない。そのためにはやはりリーダーの高い意識。自ら動いたということが大きいんです」(大倉氏)

組合傘下のホールで働く池田慈文さんも、キャンペーンをきっかけに献血活動に参加することになった一人。「それまで献血をしたことがなかったんですが、昨年のキャンペーンで5回になりました。血液センターの方と話をして、本当に血液が足りないんだとわかり、少しでも役に立つことができれば。」と語る。

池田さんは血液不足の現状を知り、ご両親にも献血に参加してもらったという。「もし、献血キャンペーンが終わったとしても、献血は続けていくつもりです」と笑顔でしめくる池田さん。リーダーの高い意識が浸透した結果は徐々に始めている。

大倉氏は言う。「献血に協力していただく人を維持し伸ばすためにも、管理者の意識付けが大切ですが、“継続は力なり”です」



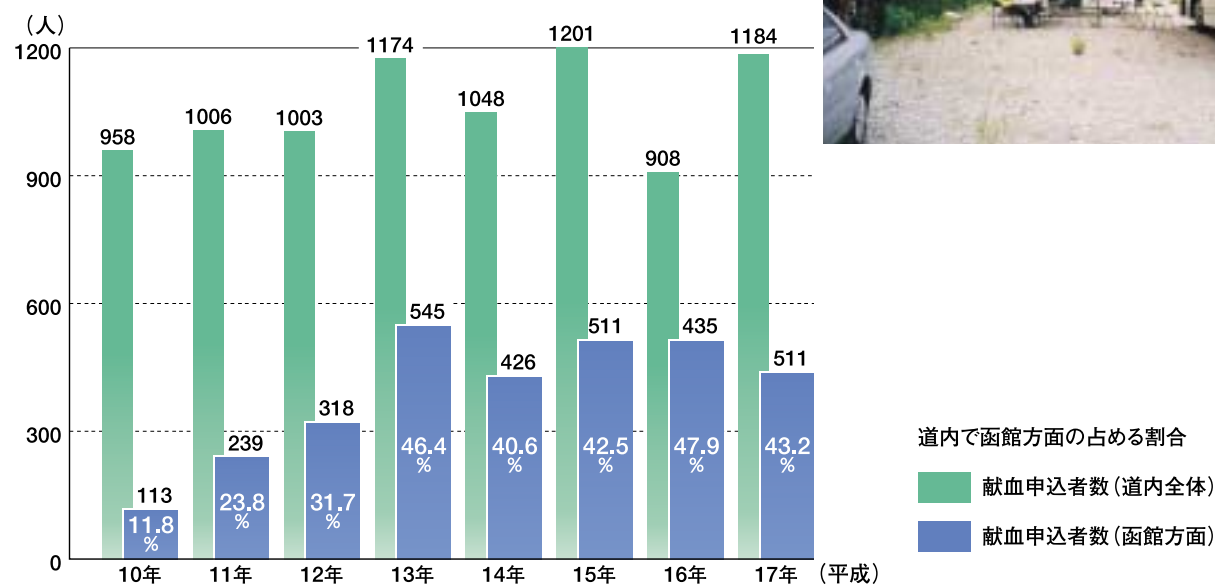
ホール駐車場の献血車

ホール駐車場を巡回ルートに加えたことで、気軽に献血ができるようになった。



■ 献血1,000人キャンペーン実施状況

献血しやすい環境づくりに尽力
函館方面遊技業協同組合の「継続力」



社会福祉賞

—選考理由—



社会貢献活動審査委員会 委員 野口 昇氏

函館方面遊技業協同組合による「献血活動事業」は、組合員を中心に、その家族、そして地域社会へと運動の輪を広げているすぐれた実践活動です。組合員自ら、輸血を必要としている人びとの困難に思いをはせながら、ボランティアの先頭に立って事業を実施されていることを高く評価します。こうした地道なボランティア活動の積み重ねこそ、地域社会の連帯感をはぐくむ基礎であると思います。また、活動を通じてボランティア意識を広く一般の人々に啓発していくことも大切な社会貢献です。

今後、この活動の輪をさらに大きく広げ、長く継続されていくことを期待しています。